2 究めたい

「Bunkaなう〜私の見方」3月のテーマは「梅棹ワールド」。昨年7月に死去した、日本の文化人類学の開拓者、梅棹忠夫さんの業績を国立民族学博物館の研究者が多角的に探る。

Bunka なう 私の見方　3月　梅棹ワールド

究めたい

国立民族学博物館教授　中牧　弘允

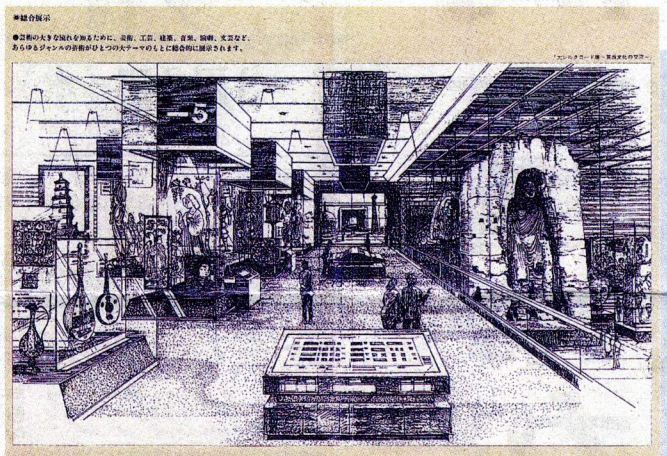
日本の文化人類学の開拓者で、昨年７月に亡くなった梅棹忠夫さんの業績を、豊富な資料とともに展覧する特別展「ウメサオタダオ展」が今月10日から６月14日まで、大阪府吹田市の国立民族学博物館で開かれる。展覧会に合わせ、梅棹さんが初代館長を務めた同館の５人の研究者に、さまざまな角度から、死後、存在感をさらに増す「知の巨人」「知の探検家」の足跡を探険し、切り取ってもらう。

民博の創設

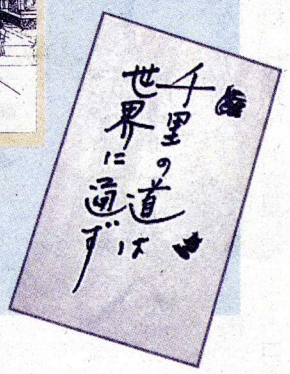
梅棹忠夫は関西を拠点に活動した。1920年京都に生まれ、旧制三高から京都帝国大学にすすみ、卒業後、蒙古の西北研究所に赴任したが、引き揚げてふたたび京都に陣取った。そこから大阪市立大学に通い、京都大学人文科学研究所を経て、国立民族学博物館（民博）の創設に心血をそそぐ。そのため千里暮らしをはじめ、そこで昨年、90歳の天寿をまっとうした。

梅棹は「京都学派」の一翼をにない、民博では館長として「千里学派」を構想した。英文の機関誌はセンリ・エスノロジカル・スタディーズと命名され、千里の名は民族学研究のなかでは世界的に知られるようになった。

その「千里学派」が目下、梅棹の足跡の再発掘・再評価に取り組んでいる。その成果は今月10日からはじまる「ウメサオタダオ展」で一般公開される。



▲梅棹の「新京都国民文化都市構想」での提案を受けて構想された国立総合芸術センターのパンフレット



▼梅棹が「千里学派」を構想した時のメモ

千里から知の「放電」

「知の巨人」とか「知の探検家」と形容される梅棹は異彩をはなちつづけた。発想は独創に満ち、理論は明晰（めいせき）、文章は簡潔、観察眼と鑑識眼をそなえ、決断は果敢で行動は着実だった。その先見性は「文明の生態史観」や「情報産業論」で世間の注目を浴び、その革新性は知的生産の技術や民博の創設で遺憾なく発揮された。しかし、みずからは「知のプレイボーイ」を自称した。こうした存在をいかに展示するか。

実行委員会が出した結論は、氏名のカタカナ表記で革新性を印象づけ、1階は著作集、2階は年譜でまとめる、というものであった。1階展示は頭脳の外化である。フィールド・ノート、日記帳、スケッチ、地図、写真、京大型カード、オープンファイルなどがそのアイテムである。それを通して、全22巻・別巻1の『梅棹忠夫著作集』へといざなおう。2階では90年の軌跡をたどり、時代を先取りした先覚性と斬新性を来館者にも発見してもらおうではないか、と。

探検と発見を生涯の行動原理とした梅棹は前人未到の領域を開拓した。重箱の隅をつつく学問をいましめ、専門を超えろと叱咤（しったた）激励した。エピゴーネン（亜流）を忌避し、アヴァンギャルド（前衛）を奨励した。みずからもせまい学問の世界をとびこえ、社会の要請に応えようとした。あるいはむしろ、ニーズを喚起し創造していった。

そのひとつが大阪万博である。正式の委員にはならなかったが、裏方として奔走した。基本理念の作成やテーマ館「太陽の塔」の民族資料収集に関わり、佐藤栄作首相と石坂泰三会長の挨拶文を起草した。収集した民族資料の大半はのちの民博に移管され、民博誕生に一役かうことになる。

万博以降、梅棹は博覧会や博物館、さらには文化行政に引っ張りだことなる。かれは文化は公事であると強調する一方、教育はチャージ（充電）、文化はディスチャージ（放電）であると理論化し、文化政策の主導理念を樹立する。

国家の文化政策にも関与した。現代の総国分寺をめざした「新京都国民文化都市構想」は大平正芳首相の急死で実現しなかったが、関西の未来像におおきな示唆をあたえた。

「ウメサオタダオ展」は一種の放電装置である。発見から創造へ、知的エネルギーが千里から世界をかけめぐることであろう。

なかまき・ひろちか　1947年長野県生まれ。76年東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。国立民族学博物館・総合研究大学院大学教授。宗教人類学、経営人類学、ブラジル研究、上海万博研究などに従事。著書に『カレンダーから世界を見る』『会社のカミ・ホトケ』など。